

# 聾啞幼稚園

東京聾啞學校長

樋口長市

聾啞兒にも幼稚園があり、學齡期前の幼兒を收容して、家庭に代つて保育を施して居る。その名稱は、必ずしも幼稚園と掲げるには限らぬ。英米に於ては託兒學校と掲げ、我國に於ては聾啞學校豫科と掲げて居る。がその保育内容は、少くも幼稚園と同種類のものである。それ故こゝには、これを聾啞幼稚園と汎稱したのである。而してこの幼稚園と普通の幼稚園との異點は、言語を教へ込むを以て主なる事業と爲すまいふ點に存する。是れ正常の幼兒にあつては、小學校入學前に既に三千以上の語彙を、家庭並に社會に於て自然に收得して居るに反して、聾啞兒は家庭及び社會に於て、全く一語だも收得し得ないが故に、家庭に代つて、特にこれを教育する必要があるのである。是に我國に於ては幼稚園といはずして、豫科と稱する所以が存するのである。言語が自由に使用出來ない所からして、この幼稚園の保育科目には、唱歌科もなく、お話科もない。否お話科は言語教授であり、遊戯科も亦言語を中心として授けられる。唯手技科のみは、言語を要するこゝ少いが故に、幼兒の自由活動に委し、その外觀が一見普通の幼稚園に類似するのみである。且つまた言語が通じない所からして、一教室に於て一保姆の擔當する兒數も亦、普通の幼稚園よりは遙かに少數である。米國に於ては五人ぐらゐを理想として居るが、我國に於ては八人以上を一保姆の擔當して居る。これ亦普通の幼稚園と異なる所である。

聾啞兒を一般に概稱するが、其種類は決して一ではない。聾啞幼稚園に於ては、保育の傍これらの種類を鑑別し、やがて聾啞學校初等部尋常小學校類似の學校に進ましめる際に、各種類によつて學級を別異にし、それら適當な教育を受けしめるやう準備するを以て一の任務とする。尤もこの鑑別は、機械に訴へて決定することもあるが、何分にも幼弱なしかも言語のない兒童のこころで、機械によつて檢出した所が、果して信憑出来るや否や甚だ疑なき能はずである。それ故修業年限二年または三年の間に於ては、保姆の觀察經驗によつて大凡の目星をつけるのみで、適確な鑑定は、初等部に進み、兒童の稍々長じた後に行ふが普通である。従つて聾啞學校に於ては、豫科に於ても本科に於ても、學級の編制變へが頻繁である。

聾啞兒の種類が一でないことは、専ら聽力の等でない點から言葉を立てたのであるが、その最も數の多いのは、(一)生れつき聽力を全失して居る所謂全聾であり、次が(二)生後暫らくは聽力を保有し、話聲を聞きまた幼な言葉を弄した経験を有するが、疾病の爲聽力を喪失し、同時に幼な言葉も使用しない所から漸次に忘却して、終に生來の全聾と同種類の者に墮し去つたものである。この二種類の聾兒の多いことは、統計の上からもこれを立證することが出来る。乃ち余が校の開校明治十三年以來今年までに入學を願ひ出でた聾啞兒千六百名の統計によれば、生來の聾啞なるが四十五パーセント、生後聾啞となつたのが四十五パーセント(他のパーセントは兩者の何れに屬するか不明である)、而して生後聾啞となつた者の年齢を調べて見れば、一歳から三歳までなるが最も多く、四歳以上なるは俄かに僅少な傾向にある。凡そこの比率は、全國聾啞學校兒童一萬五千人について調査した所と、大なる差異がない。これらによつて見れば、生來の聾が最も多く、それに次ぐのが生後聾となつたものであるといふ現實の事實が、裏書きせられ得るのである。

(三)しかし生後風に失官したものの内には、全然言語を缺如するものは稱し難く、幼児の日常生活に最も用の多い幼な言葉例へば「オッバイ」、「ウマウマ」、「イヤイヤ」等を保持して居るも往々にある。これは恐らく慈母に添乳せられる度毎に、一日に何回もなく聞かせられ言はせられ、従つて最も鞏固に印象して居る言語であるからのことであらう。嬰兒時代にはこの他にも、尙數々の幼な言葉が繰られた筈であるが、罹病失官のこもに忘却して、その影も形も留めないが普通である。

(四)また幼児期に至つて失官したものの内には、より多くの言語を保持して居るもある。が、それを使用する機会が少いこ、假令使用しても何らに聽えない爲矯正することが出来ず爲に年月を経るに従つて音聲が次第に變調して、聞き苦しい言葉となるが多い。(五)生來または生後失官したものの内には、多少聽力を残存し、兩耳または一耳の傍で大聲に發音すれば、聞き取り得る者もある。これを普通に殘聽者または難聽者といふ。されど同じく殘聽者ながらも、家庭その他に於て利用せられない爲、聽力は耳底に眠つて居り、幼稚園入園後検査によつてこれを發見し利用しようとしても、單なる音として聽き取らせ得ても、言葉としては聽き取らせ難いものがある。(六)生來または生後の疾患の爲、言語の機能を失ひ、聽覺のみは保有して他人の言語を聞き分け得ても、自らの意志を表現するここの出来ないものもある。通常聽啞といはれて居るがこれである。(七)以上の種類の何れかに屬しながら、智能の著しく低い、即ち聾啞にして兼て低能なるものもある。しかも聾啞兒中にこの種の擧數の多きこは、普通の幼兒間に於ける比ではない。こはまた生後失官の原因から見ても、肯かれる事柄である。乃ち前述の生後失官者一歳乃至三歳の者について、その失官原因を尋ねて見るに、最も多いのが腦膜炎、次が腦打撲、次が中耳炎、次が腦病(恐らく腦膜炎なるものならん)である。これらの病原は、單に聽覺または言語の中樞を冒すのみで、叡智の中樞は冒し得ないこは、何人が言ひ得よう。

これら多種の聾啞兒が家庭にある間の状況は如何にいふに、言語としては唯泣く笑ふ呼びかけるの三つの叫び聲の外には、聲といふものを出さぬが比々皆然りである。しかもこれら叫びが、普通の嬰幼兒よりも遙かに多い。これ彼はこの方便以外に、その意志發表の途を有せぬからのこみである。而して母の普通の交際は所謂異心傳心で、互にその要求を満たしあひ、何等不自由のなき様、誠に一驚に値するものがある。勿論成長するに従つて、兩者間の特約に成る身振手真似を以て、思想交換の方便とするは一般の傾向ではあるが、この方便は、他の人々との間には全く用をなさぬ所からして、彼は自然に家庭並に社會に於て、寂涼たる生活を餘儀なくせられて居る。即ち兄弟も近隣の子供も、意志が通じ合はない所からして、自然に離れて行き、彼は一人ポッチに置き去られる。でなければ母の腰に纏ひつき厄介視せられて居る。斯くて彼は精神活動も鈍く、嬰幼兒に最も旺盛な發表本能は自然に萎縮して、全體として活動性の乏しい、環境から孤立した、身心發達の後れた一存在として、犖々乎として呼吸して居るのみである。

然るにこれを聾啞幼稚園に收容すれば、同類のしかも身心發達の程度の類似した伴侶を得る所からして、心身の活動は俄かに増大し、嬉々として遊戯して止まない。また發表本能の擡頭によつて、身振手真似を以て朋友に話しかけ、俄かに社交人化する。而してこの身振手真似には、彼の創造になつたものもあり、或は家庭に於ける母との交際語であつたものもあるが、これを使用して友を誘ふ際、最初こそ恠訝な顔付を以て迎へられる、再三再四試行して意味が推量せられるに至れば、破顔一笑「了解した」といふが如き顔付を以て迎へられ、こゝに兩人間に約束的の手話が成立する。而もこれが漸次交友間に傳播すれば、終には聾啞社會の通語となり、正常なる言語教授の妨害となるに至る。幼稚園の方針としては、彼等の發表動悸を強盛にすると同時に言語を教へ、それによつて彼等間のみならず、正常者との間の交際語たらしめよう。彼等の間に醸成せられる手話は、正常の言語を以て漸次置き換へしめようとするのであるが、正常の言語の收得は

遅く、手話の取得は速やかな爲に、聾啞幼稚園は恰も手話を以て保育して居るかの如き觀を呈し、保母をして聾啞落膽せしめる事が多い。

#### 四

聾啞幼稚園に於ては、言語を教授せるを以て主要な事業となすこと、前段に述べた所の如くであるが、その教授がまた普通の幼稚園と異なる。

入園した幼兒には、先づ保母の唇竝に顔面筋の位置運動を觀察せしめ、その意味を推知せしめる。これを讀唇ミ(又讀顔又讀話ミ)といふ。例へば保母が「メ」ミ言つて自の眼を指せば、幼兒は保母の唇の動き工合ミ眼ミを聯合して、「唇が彼の様

に動けば、之れを意味するのである」ミ推知し、「ミミ」ミ言つて自らの耳を撮めば、幼兒は同じく唇の動き工合ミ耳ミを聯合し、後に至つて保母が「メ」ミいへば幼兒は自らの眼に指を觸れ、「ミミ」ミいへば耳を撮むに至るのである。

斯くて「メ」、「ミミ」、「ババ」、「ママ」の如き唇の音、換言すれば外から觀察し易い音から始めて、漸次口の内部の發音器官によつて起される音竝に語に及ぼし、半年の後には、「お立ちなさい」、「おすわりなさい」、「跳びなさい」、「お出でなさい」、「お歸りなさい」等の教室語を讀唇し得るに至らしめて、次の事業たる發音し言語を操つる仕事に漸次移行するのである。がこの讀唇が中々の難事業で、思ふやうに言ふやうに行かぬので、泣かせられるが保母の毎日の行事ミ言つても過言でない。彼等は保母の言ふことミを聞き得ない所から、自由に任意に行動して、少しも落ちつかない。僅かに七八人の數ミはいへ、管理が殆んき出來ぬ。漸くに落ち著かして保母の唇に注視せしめ得たかミ思へば、彼等は唯保母の動作を模して眼を指したり耳を撮んだりするのみで、唇の運動ミ聯合せしめない。……それ故毎日の仕事は、磧の河原の石積み遊びの如く、片端から崩れて、その工程の片鱗だも留めない。加ふるに彼等は口言ふ能はざる所よりして、隣席の朋友ミの

歪み合ひに、口論は脱きにして直ちに直接行動に出で、泣く、床板を踏み鳴らす、爲に授業は總崩れになり終るが普通で、普通の幼稚園には見られない現象である。

發音發語(言葉を操つる意味)は、讀唇によつて授けた所に大體雁行する。即ち五十音圖上のバ行マ行パ行等の唇音の、外見上見易い音を模倣によつて發音せしめるより始める。幼兒は保姆の唇その他發音器の動きを模倣するは言ふもの、唯目に見える限りを模倣するのみで、聲帯の振動を模倣するこゝが出来ぬ。従つて池中の鯉の如く、徒に口をバクバクせしめるのみで、聲を發しない。乃ち保姆は幼兒の手を取つて己の咽喉部に當て、聲帯の振動を觸知せしめて後、幼兒にも亦同一の振動を觸知するやう、自らの手を自らの咽喉部に當て、聲帯を振動せしめる。元來聾啞して、笑ふ泣く呼びかける等の叫び聲を有するこゝ、前陳の如くであり、しかもその叫び聲が、清らかな明快な聲でありながら、倍愈々發音發語にこれを利用しようとなるこゝ、これと異つた不明瞭不愉快な音を發するので、全く落膽せしめられる。換言すれば、彼等は言語の學習となるこゝ、「生みつけられたる聲を使はずして、造られたる聲を使ふ」のである。何故に然るか。若し神が然せしめるこゝならば、何ぞ神の惡戯の多きやと嘆せざるを得ない。

難聽兒になるこゝ、この發音發語の教授は容易になる。これ難聽兒は、教師から耳邊で大聲に言語を吹き込まれて、腦裏にそれらの標準を植えつけられ、自らその標準に合するやう大聲に發音發語し、(自らの口と耳とが接近せる故自らこれを聞き得る)試行錯誤によつて矯正し得るからのこゝである。従つてこれらの兒童は、正常の兒童と同様な清らかな言語を使用し、語彙も豊富に、學業の進歩も著しく、裕に正常兒に雁行し得る。而もこれらに讀唇を教へる所以のものは教場に於てこそ彼等は教師の言語を聽覺によつて受領し得れ、その他に於ては、距離を隔て、對談せざるを得ない所から、全聾同様他人の言語を讀唇する必要があるからのこゝである。

聾啞になれば、この讀唇を教へる要は更になく、全く正常者同様、耳に訴へて教授するのであるが、發音發語の教授の依然として困難である。これ彼等の多くは、失語と同時に精神能力をも缺損し、習得力低劣で、覺え難く忘れ易いからのことである。

以上各種の聾啞児について、言語教育法の種類の異なるを擧げたが、その内生來の聾啞竝に生後夙に失官して生來聾を選ぶ所なきもの、或は時には多少聽力を殘存するをも、これを言語教授上に利用の出來ない程度のものに對して適用する讀唇法を、一名視法といふ。これ言語を聞かすめずに視せしめるからのことである。また聾啞に對して適用する普通の言語教授即ち耳より注入する言語教授法を、聽法といひ、難聽兒に對して適用する。一面讀唇せしめながら他面耳より注入する言語教授を聽視法といふ。聾啞學校の言語教授は、この三法の内の孰れかによつて行はれて居るのである。

## 五

聾啞幼稚園の「お話」が、普通の幼稚園の「お話」と異なること、大要上述の如くであるが、この外に尙一つ差異の著しい保育項目がある。それは唱歌遊戯である。普通の幼稚園に於ては、幾多の天使が嘲噓たる音楽に合はせて、拍子おかしく歌ひ舞ひ躍るのであるが、聾啞幼稚園には、音楽もなく唱歌もない。唯太鼓の拍子に合はせて、手振身振を或は急に或は緩に、或は強く或は弱く振舞のみである。而してこの拍子は、彼等が太鼓から生ずる空氣の波動を身體の皮膚に感ずるによつて知るのであつて、聽覺によつて知るのではない。普通の幼児であつたならば、ピアノの拍子も、バンドの拍子も、聽覺によつて感知するのに、彼等は太鼓の振動を觸覺によつて感知するのである。再言すれば、聽覺の代りに觸覺を使用して、唱歌遊戯又は動作遊戯をするのである。

凡そこの一感官の缺損能力を、他の感官の能力によつて代償するを「機能代償」といひ、特殊教育の一原則になつて居

る。前陳の讀唇に於て、聽覺の代りに視覺を使つて他人の言語を理解するのも同様に機能代償であり、また盲人教育に於て、視覺の代りに觸覺を使つて點字を探り讀ましめるのも、手無の教育に於て、足を使つて食事針仕事タイプライター打ちから紅化粧の身たしなみまでをなさしめるのも、等しくこの機能代償である。

尙他の原則として、特殊教育を支配して居るは、「殘力利用」の原則である。前陳の難聽兒に耳邊の大聲によつて教授する、或は所謂補聽器を使つて教授するも、その例であるが、また鼓膜又は中耳の三聽骨の破壊によつて、音波を内耳に傳達するこゝの出来ないものには、電話の受話器を變形したものを齒牙または耳朶の後なる乳嚙突起に當て、音波を電波に變じて内耳の聽神經に傳へる。これ亦殘力利用であり、盲教育に於て、殘存視力を利用して、墨字を讀み書きせしめるも亦この原則を適用したものである。

聽官が缺損しても、聽覺の中樞が缺損して居ないに於ては、何等かの方法によつて、言語を物質振動化して傳達するこゝが出来ようが、しかし幼兒にせよ兒童にせよ、これを音とし語として識別するまでには、莫大な練習を要するこゝ、更に言ふを要しないが、聽覺中樞まで缺損して居るに對しては、何の施こしやうなく、結局は視覺その他の感覺を以て代償するより外に途がない。通常この前者に屬するを傳導聾といひ、後者に屬するを神經聾といひ、畢竟するに、聾啞幼稚園は、この二種の聾に對して、特殊教育の二原則を適用し彼等に幼兒時代の生活を享樂せしめるによつて、その發育發達を圖るを以て、固有の業務となして居るものである。